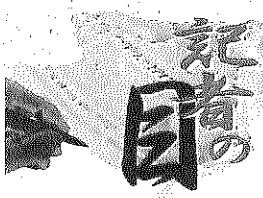
護岸工事再開を巡り、県へ抗議する自然保護団体の関係者ら―9月26日、瀬戸内町嘉徳

災害への備え再確認を

民間のライブカメラに感謝



台風に関する取材は報道機関にとって重要で、台風の常襲地域である奄美群島の地方紙にとってはなおさら。9月18日に奄美地方北部の一部を暴風域に巻き込んだ台風14号は過去に日本を襲った台風の中でも最大級。衛星画像のくっきりとした小さな台風の目が勢力の強さを如実に語っていた。風の強さとともに不安が増すのを感じながら、徳之島全体を車で走り回った。

不肖ながらも総局をあずかっている身。本社へ記事を送った後に慌てて台風への備えに取り掛かった。総局は海が近く海抜3㍍の低地にあり、大雨だとそばの側溝があふれることもある。「大事な品だけでも水に浸からないように高い所に移動させなければ」と思ったものの、いざとなると迷いに迷った。

「カメラか、それともパソコンか。車はどうする?」と一人であたふた。幸い心配されたほどの被害はなかったものの、常襲する台風への備えでさえこの始末だ。地震など予兆のない災害だったらどうなっていただろう。普段からの備えがまったくできていないことを痛感した。

実際に避難したことも記憶に新しい。今年1月16日午前0時15分、眠りかけていた耳元のスマートフォンから津波警報のアラームが響いた。地震もなかったのに突然の夜中の警報。当初は誤報ではないかといぶかったが11年前の東日本大震災の津波の映像が頭に浮かび、仕事道具と飲料水を車に放り込んで高台へ走った。

普段は静まりかえっている道路にはひっきりなしに車が走り、高台へ上る道路には車の列ができた。十分な高さのある場所へ避難したことを本社へ報告すると「避難所を取材しろ」との命令。困ったことに取材できそうな避難所は一度低地へ下らないとたどり着けない場所だった。

何とか海の様子を確認しながら移動できないかと思案したところ、思い出したのが徳之島町亀津の市街地の様子をインターネットで常時配信しているライブカメラだった。暗くて何も見えないのではという心配もあったが実際にスマートフォンで見てみると街灯に照らされた大瀬川河口の水面が確認できた。おかげでおびえることなく避難所までたどり着くことができた。

このライブカメラを設置したのは亀津でスーパー「ダイマル」を経営する義村浩商店の義村浩社長（73）。当初は「島を離れて暮らす出身者がいつでも徳之島の……津波警報があった際に役立った亀津地区のライブカメラの映像―1月16日午前1時ごろ

風景を見られるように」との思いで設置したが、台風の際はテレビ局などから映像を使用したいという問い合わせも多いという。

津波警報の避難の際に役立ったことを義村社長に伝えると「そんな形でも役立っていたとは思っていなかった」と驚きながらも、「好評なので大瀬川の上流方向を撮影するカメラの増設も考えている。これからも防災に役立ててもらいたい」と話した。

水害や津波で被害が予想される地域の大きな河川にはこのようなライブカメラ設置が進めば、いざという場合に現地に行かなくても状況を把握できる。官民問わず導入を進めてほしい。非常時にこそ普段の備えが問われる。わが身の周りでも改めて防災への備えを再確認しておきたい。

（徳之島総局・赤塚臨）